

# モンスター娘に襲われる A S M R ~ドラゴンのラーディ編~

(Attacked by a Monster Girl ASMR -Dragon Girl Lardy Version -)

あらすじ：

冒険者が訪れる大樹海。その最奥には、すさまじい力を持つ魔竜がすんでいるという。聖剣をたまさか手にした少年はドラゴンのラーディと出会うも、彼女に気に入られた少年はそのまま襲われてしまう。炎にあぶられながら、最後に少年は、このまま彼女の性奴隸となって一生を終えるか、それとも魔竜の一部になるかの選択を迫られる。

登場キャラクター：

ドラゴンのラーディ：

樹海の最奥に棲む魔竜。すさまじい力を持つが、ノリは軽くあっけらかんとしている。性交とお宝が大好きだが、あまりに強大すぎる力のため、誰も近づくことができず、退屈している。数百年ぶりにやってきた聖剣を持つ少年に、性的な意味も含めて興味津々である。

炎を吐くことができる。定期的に吐き出さないと、熱が体にたまってしまうので、イタズラ感覚で気軽に周りをあぶってくる。

少年冒険者：

偶然、聖剣を手にした少年。その力で樹海を進み、ついにドラゴンにまで邂逅したが、あっさりと返り討ちにあってしまった。樹海で見つけた最高級の装備で身を固めているが、実力が伴っていないので使いこなせていない。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

# 1. 出会い～迷宮の最奥～

ラーディ 「んん～……？ なあにい～……」

ラーディ 「あれえ……お客様～？ うっそ、マジで？ うわあ～、テンションあがるう～！ 何百年ぶりだろお～」

ラーディ 「こんなマグマに囲まれた古い遺跡によく来たね～♪ ……って、うわあ、やっぱ～、なにそれえ～」

ラーディ 「すごい、すごい、装備いっぱいじゃ～んっ。それって伝説の武器？ どうしたの～？ ちっちゃい人間の子どもなのにい、頑張ってここまで来たんだねえ～」

ラーディ 「わあ～、近くで見たら、やっぱりかわいい男の子お～！ エモすぎなんだけどっ」

ラーディ 「どうしたの、ボクっ。あーしに会いに来たの？」

ラーディ 「ん？ あー……そうだよ？ 樹海の一番奥……迷宮の深淵にひそむ、伝説の魔竜……それはあーしのことでーすっ！ イエイツ☆」

ラーディ 「あー……ふんふん、なるほどね。そつかあ、ボク、あーしを倒しに来たんだあ～。へえ～、ふうん～……そうなのお～……♪ じゅるっ」

ラーディ 「あははっ☆ ヤバっ、剣を抜いてもへろへろじゃ～んっ、そんなんじゃあーしに勝てないよお～」

ラーディ 「ほおら、がんばれ、がんばれ～♪ 装備が鬼ツヨでも、使うほうがへっぴり腰だとお、全然当たらないぞお～？」

ラーディ 「あはは、もしかして装備の強さだけでここまで来たの？ ウケる～！ 他の魔物は倒せても、あーしには……通用しないよお」

ラーディ 「そんなんじゃ、すぐ反撃食らっちゃうよお～♪ こんなふうに……ね……？ いくよお、ほーらっ……がおお～っ」

ラーディ 「んがああ～……っ！」

ラーディ 「ふうっ、吐いた吐いた……って、あれ？」

ラーディ 「あはは☆ ボクったら腰抜かしちゃってる～。ちょっと火イ吐いただけじゃ～ん♪ こんなの挨拶、挨拶っ♪」

ラーディ 「良かったねえ、ボクう？ その伝説の防具がなかったら、今頃骨も残さず灰になつたかもよ？ きやはっ☆」

ラーディ 「それにしてもお……ふうん、いいじゃんいいじゃん～、あーしね、キラキラした宝石とか、武器とか、大好きなんだあ～♪」

ラーディ「ね、ね？ その豪華な装備品、あーしにくれない？ もちろん、タダとは言わな  
いからあ……」

ラーディ「もし装備をくれたら……一人ぼっちで、いつもうずいてるあーしのおまんこ、  
使わせてあげちゃうよ～……♪」

ラーディ「くふふ、キミの装備、一個くれるごとに、気持ちイイことしてあげるからあ……  
ね、それならお互い、ワインワインってやつじゃん……でしょ？」

ラーディ「ああ～、もうおっきくなってるう～♪ 気がはやあ～いっ」

ラーディ「ふふふっ、伝説のドラゴンがあ、たっぷり財産目当てセックス、しちゃうからね  
え……くふふふっ♪」

## 2. 炎耳舐め～炎られる耳～

ラーディ「う～ん、キミ、色々装備もってるじゃ～んっ……これからもらっちゃおうか……迷っちゃうなあ……ドキドキするんだけど～」

ラーディ「一つもらうたびにい……えっちなことしてあげるから……楽しみにしてね～♪」

ラーディ「んん～どれもいいな～……迷うんだけど～……あっ、でも、最初はやっぱり上からっしょ♪ はい、よいしょ……と」

ラーディ「これこれ♪ これ樹海にある伝説の兜だよね～♪ デコったら可愛くなりそ～。じゃ、これもらっちゃうね～……いひひ♪」

ラーディ「あははっ♪ 兜はずしたら、キミのカワイイ顔が丸見えじゃ～んっ♪ こんなにちっちゃい冒険者クンなのに、あーしに勝とうとしたのぉ？ くすくす、勇気があって偉いねえ～♪」

ラーディ「じゃあ、そのちっちゃなお耳を……あーしの炎であぶってあげようかなあ」

ラーディ「あーしが吐く炎はね……生命力の塊だからあ……この炎を近づけたら、みんな元気になって、えっろい、スケベな気分になるんだよお～♪」

/ラーディ「もちろん、直で浴びたら燃えカスになっちゃうからあ、そんなことさせないよお……お耳の近くで、ちょっとだ～け炎を吐いて……キミをあぶってあげるし♪」

ラーディ「ああ、泣きそうな顔～♪ 大丈夫、怖くないからね～。あーしが優しく優しく、キミのお耳をあぶってあげる～♪」

ラーディ「準備はい～い？ 最初はね～、あーしが君の耳を、舐めてあげるよ～」

ラーディ「あーしの唾液にはあ、炎から体を保護する成分？ がたっぷり入ってるんだよ～、でないと自分の炎でヤケドしちゃうしい。あーし、そんなにドジっ子じゃないからね～」

ラーディ「んじゃ、冒険者クンのお耳、いただきま～す♪ あーむっ」

ラーディ「んちゅ……あむっ……んっ、じゅる……れろお」

ラーディ「あんっ……じゅるう……れるうつ……ちゅちゅっ……んひひつ。どーお？ あーしに耳舐められて気持ちよくなっちゃったあ？」

ラーディ「言わなくてもわかるし♪ だってキミ、気持ちよさそうな顔しちゃってるもん～。きゃはは♪」

ラーディ「耳が燃えちゃわないように、もうちょっとやってあげるね～♪ んちゅ……あむっ……ちゅぶつ、れろっ……あああ～むっ……れる、じゅるっ」

ラーディ「ちろちろちろ～……♪ れる、じゅぶつ……んん～……むちゅっ、ちゅ、じゅるるるるる～♪」

ラーディ「ふはあっ……このくらいでいいかな～？ あーしの唾液で、キミのお耳、しっかりコーティングされちゃったね～♪」

ラーディ「ここからが本番だし……覚悟してね～？ あーしが、舌先から炎を出して、キミの耳をあぶっちゃうよ～？」

ラーディ「らろお～～……えろお～～……いーい？ やっひやうからねへえ～？」

ラーディ「んはあ～……あえええ～……れっろお～～～♪ んふつ、えろろお～～……ちろちろちろちろちろ～……♪」

ラーディ「あーしの舌からあ～……ほっそい火が出てえ……キミの耳をあぶってるよお～？ ほらほらあ～？ れろおお～……んへええ～～」

ラーディ「味わったことないでしょ～……？ ドラゴンの炎、楽しんでね～♪ んへ～……んあ～……えろろろおお～～～♪」

ラーディ「んはええ～……んんああ～……はあええああ～～～……♪ ふうつ……ふはつ……♪」

ラーディ「んじゅ……ふはあっ♪ ふうつ、こんなもんかな～？ これ、結構疲れちゃうんだよね～」

ラーディ「ね、ねっ♪ どうだった？ ドラゴンの炎であぶられる感触は？」

ラーディ「きやはは、目がトロンとしてる～……♪ カラダも火照っちゃってるんじゃないの～？ スケベなドラゴンの炎、サイコーっしょ？」

ラーディ「キミがもっとも～っとスケベになってえ、どんどん装備品をくれるようになるまで……たあ～くさんあぶっちゃうからね♪」

ラーディ「顔が真っ赤になってるし♪ 血行が良くなって、ドキドキしてきたんじゃない？ それも炎の効果だと思うよ？」

ラーディ「はあい、じゃあ右の耳も……さっきとおなじよーに、あーしが丁寧に丁寧に、唾液を塗り込んであげるからあ～……ねっ♪」

ラーディ「んああ～……あむ、じゅる……れるう……んんんっ、じゅふっ、はむはむはむ～♪」

ラーディ「うふふ、舐めるたびにびくびくしちゃってカワイイ～♪ 大丈夫、かみちぎったりしないから～。きやはは♪」

ラーディ「あ～むっ、じゅぶ……あむ、えろお～……」

ラーディ「ふはっ……はあっ、ふふ、イイ感じじゃーん♪」

//7/ ラーディ 「じゃあまた、ラーディちゃんの炎で、あぶっちゃうからね～……ええああ～……ああんあああ～……」

ラーディ 「いひひ～……燃えないように……ぎりぎりでえ……んあええ～……んんっ、ええああ～……はああ～……」

ラーディ 「ぷはっ……あははっ、どう？ 興奮してきたあ？ ぞくぞくしてきたあ？ 新体験っしょ？」

ラーディ 「実はねえ……あーしが炎を出せるの、口だけじゃないんだ。指先からも魔法で炎、出せちゃうんよ？」

ラーディ 「だからあ……あーしの指を、キミの左耳に近づけてえ……両方の耳をあぶるのもできちゃうの♪ やりたい？ やりたいっしょ♪ きやははっ」

ラーディ 「両耳の直火あぶり、よく味わってねえ……ほらあ……んっ、じゅるっ、んんあああ～～～♪」

ラーディ 「んっ、んはああえええ～……」

ラーディ 「んんんっ、ぷはああ……♪ はあっ、はあっ……あー、ちょっと苦し……はあ、ふうっ、んんっ……じゅる……」

ラーディ 「きやはっ、どうだったあ？ 誰かを燃やすことはたくさんあったけど、燃やさないよーに寸止めすんのって、けっこー大変なんだね♪ あーし頑張ったよ♪」

ラーディ 「ふふっ、炎でじらしてあげたおかげでえ……キミのおちんぽも、大変なことになってるみたいだねえ……やあ～んっ♪」

ラーディ 「まだまだお小遣い……じゃなかった……キミの装備品が欲しいからあ……」

ラーディ 「宝物も、精子も、どんどん搾り取っちゃうよ～……覚悟してねえ、冒険者クン… …♪」

### 3. ドラゴンのフェラ ~アツアツのお口~

ラーディ「んふふ～、じゃあ。次はどの装備をもらっちゃおうかなあ～……♪ マジで迷うんですけど～」

ラーディ「あっ、このベルト！ バックルに宝石とかついてて、いい感じ！ テンションアガッちゃう～っ！」

ラーディ「じゃあ、これイタダキね。きやははは♪」

ラーディ「ちょーどいいし、このままキミのおちんぽ、あーしのお口でいっぱいイタズラしてあげるね～♪ ベルトくれたお礼だよ～♪」

ラーディ「あーしの……んああ、じゅぶっ……フェラテク、ヤバいんだから。腰が抜けちゃうかもよ～？ きやははははっ」

ラーディ「はあ～い、じゃあズボンも脱がしてえ……っと」

ラーディ「ああ～、もうおちんぽ、こんなになってるじゃ～んっ♪ あーしにフェラしてほしくて、勃起しちゃったの～？ カワイイ～♪」

ラーディ「おっけおっけ、じゃ、ドラゴンのあつあつロトロなお口でえ……んへえ……いいっぱいしゃぶってあげるからね～♪」

ラーディ「は～い、じゃ、期待で膨らみまくってるおちんぽ、食べちゃいまあ～す♪ あ～むっ、んっ、んんっ……♪」

ラーディ「んんっ、じゅぶっ……じゅろお……れろっ、ンン……あむう……じゅぶ……じゅるうるるるる」

ラーディ「ふはあっ……んふふ、どう～？ ちょ～っとしゃぶっただけなのにい、もうおちんぽビクンビクンしてるじゃ～んっ♪」

ラーディ「あーし、火竜だからあ、めっちゃ体温たけーんだよねえ。くひひっ、あつあつのお姉さんのお口に突っ込むの、激やばに気持ちイイでしょ～♪」

ラーディ「キミが思いっきり射精できるまでえ、ホカホカのお口でフェラしてあげるからあ、思いっきり声出しちゃってね～♪」

ラーディ「そんじゃ、続きいっきま～す♪ んん～、あむっ♪」

ラーディ「んっ……んもおっ……じゅぼっ……はんっ……んおおっ、あんっ……んっ、じゅぼおっ、じゅるううる」

ラーディ「んんはあ……んんっ……ふはっ……あはあ、やばあ、おちんぽからあ、我慢汁だらだら出てるよ～？」

ラーディ「あーし、んっ、じゅぶっ……カリんとこお、舌でしつこくう、舐めるの得意だか

らあ……んっ、んまっ……じゅぼお……れるう……」

ラーディ「んぼっ……んむっ……あんっ、んまっ……んああっ……ふふっ、ヤバあ、我慢汁  
どんどん出てくるじや～んっ、冒険者ちんぽ、美味しい～♪」

ラーディ「こんな樹海の奥まで冒険者、全然いないからさあ～……フェラすんのも久しぶり  
～♪ くっさいおちんぽ舐めてたら……んじゅぶっ……あーしも興奮するう～♪」

ラーディ「にしあ、気持ちよさげじゃーん？ まだまだ舐めちゃうよ～？」

ラーディ「はぶっ、んもっ、じゅる……んんっ、じゅる、れるう」

ラーディ「んっ、んぱあっ……はふう……は～い、一旦休憩～♪」

ラーディ「ふひ～……ん～？ どうしたのかな、キミ？ 残念そうな顔してえ～。このまま、  
あーしのフェラでイカせてもらえると思ったあ～？」

ラーディ「きやはは、まだダ～メっ。あーしのフェラテク、まだ全然、本気を味わってない  
でしょお～？」

ラーディ「んはああ～ほらあ～、みへみへえ～、あーしのお口～」

ラーディ「のどの奥までえ、ひだひだがあるでしょ～？ にしし、ドラゴンはこれでえ、獲  
物を丸のみしちゃうんらよ～♪」

ラーディ「フェラしたら、このひだひだでえ、とっても気持ちイイと思うよ～？ 人間じゃ  
味わえない、ドラゴンのお口まんこだよ～♪」

ラーディ「キミのばきばきちんぽお、今度は、喉の奥まで一気にのみこんでえ……あつあつ  
おくちまんこで、とろかしちゃうからねえ～？」

ラーディ「覚悟はい～い？ いっくよお～？ いっただきま～すっ、あ～んっ、んごお、ん  
おっ……」

ラーディ「んんおおおっ……あぶっ、んおおっ、んごっ、んごおおっ、んっ、あぶっ…  
…んもももっ」

ラーディ「ふーっ、ふーっ……♪ んおおっ、あぶぶ……ゅぶ……んごおっ……おうっ……  
んほおおっ♪」

ラーディ「んおっ♪ はぶっ♪ おっほおおお♪ んんんっ、じゅぶぶぶ……じゅぶ、あぶ  
ぶぶっ、んほおおっ♪」

ラーディ「じゅろっ……ぶはあつ……はあつ、はあつ……どう？ ドラゴンのフェラすげー  
っしょ？」

ラーディ「にしし、わかってるよお～。もう出そうでしょ～？ じゃあベルトもくれたしい、  
最後の大サービス、激しめフェラやっちゃうよ～？」

ラーディ「ギリギリまで我慢してえ、どっろどろの濃いせーし、たっぷりあーしの喉奥に吐

き出してよねっ♪ そんじゃ、いっきま～すっ♪ は～むっ」

ラーディ 「んんんもおおおっ！ じゅぶぶぶっ、ずろおおおっ……んおおおっ！」

ラーディ 「んんんじゅぶぶぶっ！ んのおっ！ んほおお……んんっ、じゅぶぶぶるっ！」

ラーディ 「んぼっ、だひてえ、だひてえ、せーしっ、せーしっ♪」

ラーディ 「んのおおっ♪ あはあ♪ びくびくして……んんんっ、だーセえ♪ じゅぶぶるるうるるるるっ♪」

ラーディ 「んんんおおおうっ♪ んんぶじゅ、んんっ、んんおおおっ！」

ラーディ 「んんっ、んっ♪ ごくっ……んっ、じゅぶ……れる……んっ、ごくごくっ……んんん～～♪」

ラーディ 「んはっ……んんんあっ、ぷっはああっ……♪ にしし、ちょっとお～、どんだけ出すのよ～♪ 喉にからんでくる大量ザーメン、ヤバい量だったんですけどお～？」

ラーディ 「あーしくらいフェラ上手くないと、全部飲みきれなかったんだからあ、感謝してよね～、にししし♪」

ラーディ 「ふうう～、さすがに喉奥フェラやっちゃうと、少し疲れちゃうな～」

ラーディ 「なーんて思ってたけどお……きやはっ、キミってば、ドラゴンおぼれさせるくらい、大量ザーメンだしたのに……まだちんぽばっきばきじゃへん。やっぱあ☆」

ラーディ 「これはもう……あーしのおまんこで抜いてあげるしかないよね～。にしし、どんなつよつよ装備も、このおちんぽには敵わないかも？」

ラーディ 「そのおちんぽでドラゴンを倒せるか……試してみる？ きやはははっ♪」

#### 4. 性交～ドラゴンとの交尾～

ラーディ「にっしし……は～い。そんじゃ、セックスするからね～。邪魔な鎧はとっちゃえとっちゃえ～♪」

ラーディ「胸のところも～……肩のところも……外して……っとお♪」

ラーディ「おおお、良いキラキラだ～♪ じゃ、この鎧はラーディちゃんがいただき～♪ いいよね？ 冒険者クン？」

ラーディ「これからあーしの中におちんぽ突っ込んでえ、気持ちイイ中だしセックスするんだからあ、これくらいもらわないとね～♪ いひひ♪」

ラーディ「あーしもお、冒険者クンのせーし丸のみしてえ……すっかり燃え上がってるからあ……覚悟してよ、ねっ♪」

ラーディ「じゃあさっそくう……おちんぽ入れるところ、見てもらおっかなあ」

ラーディ「ほうら……あーしのぉ、卵も産める総排泄孔だよ～？ もう濡れてきて、くぱくぱってして……気持ちよさそうでしょう～？」

ラーディ「きやははは☆ やば、ガン見てるんですけどお～？ もっと近くで見てイイよお、ほらほらあ～」

ラーディ「下品に足を広げてえ、大事なとこ丸見えになっちゃってるあーし、えっちでしょお～？ 腰も振っちゃおっかな～？ えいえい～♪」

ラーディ「きやはははっ、エロいかっこしたらあ……エロい気分になっちゃうよね～？ あーしも盛り上がってきたしい、そろそろキミの勃起ちんぽ、総排泄孔にいれちゃおっかなあ～？」

ラーディ「ちょっとずつ腰を落としてえ……んっ……あんっ……ふふ、良い感じい～。このまま、入れちゃうよ～？ あんっ……はあんっ……ん」

ラーディ「ああんっ……はあっ……ああ～♪ は～い、ドラゴンおまんこにい、キミのおちんぽ、ずっぷり入っちゃったしい～♪」

ラーディ「くすくす……大丈夫～？ ドラゴンの中、あつあつすぎてヤケドしちゃわない？」

ラーディ「体温調整もできるけど……あはは、キミの顔を見るに、ヘーキそうだね？ 初めて女の子とえっちできて。気持ちよさそう～♪ きやはは♪」

ラーディ「レアものの鎧もくれたし～……あーしの特別サービスで、上に乗って動きまくってあげるね～♪ ほーら、よいしょ、よいしょっ」

ラーディ「腰をお、こうやって、くねらせてえ……ひゃんっ、あんっ……かったあいおちんぽ、おまんこでしごいちゃうぞ～♪」

ラーディ 「んんっしょ、よいしょっ……あんっ……んんっ、はあんっ……やんう……」  
ラーディ 「あはあ♪ おちんぽびくびく跳ねまくってるう♪ ドラゴンのほかほかおまんこに耐えられないの～？」

ラーディ 「そんなのダ～メっ♪ やあんっ……ひゃんっ……おまんこですぐギブアップなんてえ、そんなんじゃドラゴン倒せないぞ～♪」

ラーディ 「ほおらあ……あんっ……ゆっくりい、やさしく動いてあげるからあ、あッさり射精しないでえ、頑張ってえ……♪」

ラーディ 「そーそー♪ おちんぽ射精、我慢するんだぞっ♪ はあんっ……んおっ……んんっ、ひいんっ……」

ラーディ 「おちんぽ～、がんばれ～、がんばれ～♪ 射精我慢だよ～♪ がんばれ、がんばれっ、ドラゴンにい～、負けるなあ～♪」

ラーディ 「にししし♪ あれあれえ？ おちんぽ固くなってきちゃったねえ～♪ これならあーし、おちんぽに倒されちゃうかも～♪」

ラーディ 「んんあっ、あんっ……んっ……はあんんっ……おっ、いー感じじゃーんっ♪ ちよつとはセックス慣れてきたかなあ～？」

ラーディ 「はああんっ……がちがちおちんぽで、あーしやられちゃうかも～♪ あんっ……んんっ、くひいっつ……」

ラーディ 「ほらほら、がんばれがんばれえ～♪ おちんぽであーしのこと倒せたら、みんなに自慢できるかもよお～♪ きやははっ♪」

ラーディ 「ああんっ……急に胸触るなんてえ……んんああっ」

ラーディ 「んはああっ……おっぱい、感じるんだってばあ……んんっ、はあん……やだあ、触ってばっかりい」

ラーディ 「あんっ……あはあっ……んんああっ、あんっ……んんっ、も～、あーし、キミのママじゃないんだよ～？ そんなに触ってもお、なーんも出ないってえ……」

ラーディ 「んもうっ、スケベなキミには～……こうだあ～♪」

ラーディ 「んっ……んむっ、じゅる……れるっ……にししし」

ラーディ 「ほらほら、乳首に反撃しちゃうよ～？ ドラゴンの熱い舌でえ……キミの乳首、丁寧に丁寧に舐めてあげるんだからあ～」

ラーディ 「んんっ……ちゅぶ……れるっ……じゅる……にしし、キミの乳首美味しい～♪ セックスしながら乳首舐められるのぉ、結構いいっしょ？」

ラーディ 「んんぶ、じゅる……れろお……あむ……はーむう、ああんっ……いいっ、あーしもキミの顔見てえ、興奮してきちゃったあ」

ラーディ「キミはどう～？ セックス慣れてきたかなあ～？ じゃあ、そろそろあーし、本気出しちゃうけど……いい？ いいよね～？ にしし、やっちゃうよお～」

ラーディ「セックスだあ～いすきなあーしが、今から本気のグラインドしちゃうからあ～、思う存分燃え上がろうね～♪ いくよお～、せーのお……」

ラーディ「ああんっ……！ んんっ、あんっ……んはあつ……あふつ……んっ、んおおつ……ああんっ……」

ラーディ「んんんっ……あっ、そこお……イイとこ、当たるんですけどお……んんああつ、はあんっ……ああんっ……！」

ラーディ「ああっ……んはあつ！ あうつ……ひぐうつ……あつヤバあ、これえ、あーしもめっちゃあ、気持ちいっ……んんっ」

ラーディ「きもちよくてえ……勝手に尻尾、びくびくしちゃうううんっ……んんっ、はあんっ……ああんんっ！」

ラーディ「んはああつ、あーしがあ、気持ちよくしてあげようと思ったのにい……このおちんぽ、結構……んっ、強いかもおお……」

ラーディ「んんあっ……はあっ……あーヤバっ、声、おさえらんないっ……」

ラーディ「んふうっ……あんっ、やっ……ああんっ……んああんっ……ああんっ……んんっ！」

ラーディ「ふーっ……ふーっ……あーしをお……ここまで本気にさせるなんてえ……キミのおちんぽ……なかなか、やるじやん……？」

ラーディ「でもお、キミも……にしし、限界みたいだねえ……そろそろ思いっきり、精液ぶちまけちゃってもいいよお」

ラーディ「ああんっ……んんあっ……はあんっ……んんっ！」

ラーディ「んのおっ……おううつ！ ひぐううつ！ あーヤバあ、最強ドラゴンが出しちゃいけない声だしてるう！」

ラーディ「ほらあっ、イケっ、イケっ……！ あーしの中にい、いっぱい、精液出しちゃえっ！」

ラーディ「んほおおつ！ おちんぽ膨らんできたあつ！ んおおつ！ イグ！ やば、ああんっ、これイグッ！ ショタちんぽでイグうううつ！」

ラーディ「んんあああああつあつ！ おほおおおつ！ すっご……んおつ、精液めっちゃ……びしゃびしゃ……出てるううう！」

ラーディ「ああああ～……おまんこびくびくしゅるうう……めっちゃイッた……あー、こんなのお、久しぶり……」

ラーディ「はあっ……はあっ……しゅご……んんんっ！ イカされちゃったあ……にしし、でも、キミのほうが先にイッたからあ……あーしの勝ち、だよねえ？」

ラーディ「んん～、テクはまだまだだけどお……割と相性は良かったかも？ にしし……どんなレア装備も敵わない……レアおちんぽ見つけちゃったかも……」

ラーディ「これはもう……キミをあーしのコレクションに加えるしかないよね……ふふつ……じゅるり」

ラーディ「これからいっぱい頑張ってもらうからあ……セックスのレベルアップ、よろしくね……きやはは♪」

## 5. 休憩～焚き火とハグ～

ラーディ「ふうう～……」

ラーディ「いやあ、マジで激しめにやっちゃったね～♪ にしし、あーしも気持ちよくされちゃった。キミ、なかなかやるじゃ～ん♪」

ラーディ「もっとシタイキモチもあるけど……ま、いきなり無理しすぎるのも良くないし、ちょっと休憩だね～♪」

ラーディ「あ、もしかして寒い？ そりやそーか、装備全部はぎ取っちゃったもんね～♪ よーし、ちょっと待ってて」

ラーディ「んっ、んぐ……よし、おつけ」

ラーディ「いっくよ～……んがああ～～～～～ッ！」

ラーディ「よーしよし、火がついたね～♪ どう？ お姉さんの即席焚き火だよ～」

ラーディ「人間はこうしてあったまるんでしょう～？ にししっ、意外とあーしも、人間のことよく知ってるっしょ」

ラーディ「あとはあ……キミの後ろに回って……」

ラーディ「キミのこと、後ろからこうして抱きしめてあげるね～♪ は～いっ、ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅう～～～っと」

ラーディ「ほらほら、あーしの手と、大きな翼でえ、キミのことをハグしちゃった～♪ ドラゴンの焚き火とハグでえ、もう寒くないよね～♪」

ラーディ「よく考えたらあーし、誰かとハグしたことなんてなかったかも♪ にしし、最強生物も結構、大変なんだよ～♪」

ラーディ「ほらほらあ、もっとくっついてえ～♪ 離れてると寒くなっちゃうよ～♪」

ラーディ「すう～……はあ～……すう～……はあ～……すう～～…………」

ラーディ「すうう～……にししっ、弱小生物のぬくもりを感じる～……あーし、ずっと一人ぼっちだったからさあ～」

ラーディ「あーし、生命エネルギーが強すぎて、ほかの生物は近寄れないんだよね～……」

ラーディ「……ほらあ、ねっ、ちょっと聞いてみてえ。ほら、おっぱいに頭をおしつけてえ～……そ～れっ」

ラーディ「ね？ わかるう？ ……あーしの心臓の音」

ラーディ「ドラゴンの心臓って特別製で……いつもヤバい熱がばんばん外に出ちゃうんだよね～」

ラーディ「だから……フツーの生物とは長く一緒にいられないんだって。まじメーワクなんですけど」

ラーディ「あ、キミは大丈夫だよ～♪ ……だってもう、耳舐めで、あーしの炎に順応するように改造したから……」

ラーディ「だからあ、もうちょっとだけ……キミとのハグ、楽しませてくれると嬉しいなあ～♪」

ラーディ「んん～……ほらあ、心臓の音……聞こえるっしょ～？ ……どくん、どっくん… …ってえ……」

ラーディ「あ、それともお……あーしのおっぱいのほうが気になるかなあ～……にしし、あーしのおっぱいに甘えていいからねえ……」

ラーディ「よしよし～……な～でな～で……きやはっ……甘えん坊さんでしゅね～？ ……よしよし……よ～しよし……」

ラーディ「んふっふ、人間とのハグ、たっぷり堪能しちゃった～、嬉しみ～♪」

ラーディ「キミも休憩できた？ それともお……あーしと抱きついて、またムラムラしちゃったかなあ？」

ラーディ「キミのセックス、マジで良かったんですケド♪ あーし、キミのこと気に入っちゃったんだ♪」

ラーディ「キミさえよければあ、あーしとここでえ、もっともっと気持ちいいことしようね♪」

ラーディ「あ、イヤなのお～？ ドラゴンを倒すんだ、って？ きやー、こわあ～い♪ つよつよ冒険者に倒されちゃうう～♪」

ラーディ「キミがまだまだ装備品、隠し持ってるの知ってるんだからねえ……にししし♪」

ラーディ「倒されちゃわないように……キミの装備を奪ってから、たっぷり犯しちゃうよ～。覚悟してね～♪」

ラーディ「あんっ……で、でもその前に、ちょっと……なんだか、体がムズムズしてきたかもお」

ラーディ「キミのせいだからね？ あんなに激しく動くから……んもう、セックスの前に、こっちやらなきゃ……」

ラーディ「なにって……決まってるでしょ？ 脱皮だよ、脱皮♪」

ラーディ「そーだっ♪ せっかくだからあ……キミにも手伝ってもらおうかなあ……」

ラーディ「無事に脱皮ができたあ……あんっ……いっぱいえっちなサービス、してあげち

やうから……ねつ♪」

## 6. 本気の準備 ～脱皮のお手伝い～

ラーディ 「んん～じゃあ、早速、脱皮のお手伝いしてもらおうかなあ～」

ラーディ 「は～い、見てみて～、あーしの可愛い尻尾。鱗とかトゲとかたくさんあって、結構エモいでしょ～？」

ラーディ 「でもお尻についてるからあ、自分だと脱皮しづらいんだよね～。手伝ってくれる～？」

ラーディ 「え？ どうしたらいいかわかんないって？ 簡単だよ～。ほら、こうしてえ、鱗のはがれかけてるトコをお……ペリペリ～……って」

ラーディ 「んっ……はあんっ……んんっ……ねっ？ キレイにむけたよ～？ 簡単っしょ？」

ラーディ 「い～い？ 優しくやるんだからね？ 亂暴にはがすと痛いから、優しく、優しくだよ？ 脱皮前のドラゴンはすっごくデリケートなんだからね？」

ラーディ 「ここ、こ～こ、尻尾の付け根のほう、全然上手くできないし。ちゃんと皮をはがしてね～、冒険者クン♪」

ラーディ 「あんっ……んんんっ……はうっ……んはああっ……」

ラーディ 「ああ～、良い感じじゃん♪ にしし、上手上手～♪ んっ……んんっ……そう、優しくう……あんっ……はっ、気持ちいいい～♪」

ラーディ 「そうだよお、優しく、皮をむいていくとお……あーしも、気持ちよくなるからあ……あんっ……んああっ……あんっ……」

ラーディ 「いいじゃあん……最高ッ……んっ、あーしが自分でむくよりも、上手かもお……あんっ……」

ラーディ 「あっ……んんっ……そうそう、ちょっとずつ……丁寧にっ……あんっ、はあんっ……！」

ラーディ 「んんんっ……やあっ、そこを、尻尾の先端から、するのぉ？ んんっ、敏感だからね？ 優しくやってね～？」

ラーディ 「んいっ……ひああっ……あんっ……！ んあああっ、脱皮の刺激とお……皮がむける気持ちよさでえ……んんっ……勝手に腰が動いちゃう……はしたなくお尻振っちゃう……！」

ラーディ 「はあんっ……んんっ、すっごお……皮がむけるのぉ、痛気持ちイイからあ……にし、あーしの身体あ、全身クリトリスになっちゃったみたいっ……」

ラーディ 「あっ、んあっ……はあんう……脱皮、誰かに手伝ってもらうなんて初めてだから

あ……あっ、んっ……ちょっと、興奮するかもぉ……♪」

ラーディ「うっ……ふううん……んんっ、いいね～……あんんっ……先端はむけたからあ、そのまま……あんっ……尻尾の根元まで、皮をはいでいってね～……」

ラーディ「あっ……ひやあっ……んあっ……ちょ、ちょっとお、むけたばかりの先っぽ、敏感だからあ……あんっ、あはあっ……あんまり触らないで～」

ラーディ「もー……イタズラ好きでスケベなんだからあ～、ほ～ら、ちゃんと、あんっ、脱皮のお手伝いしてよお～」

ラーディ「んんっ……そうそう、偉い偉い～。あんっ……んああっ……あっ、ヤバ、この子、もうコツ掴んでるう……」

ラーディ「はああんっ……ペリペリってえ、どんどん、あーしの皮、むかれちゃってるう……あんっ……うますぎなんですケド～♪」

ラーディ「はあんっ……あっ、やばああ、皮むかれるのぉ、気持ちよすぎて、勝手に腰はねちゃううう……気持ちよくなってるう」

ラーディ「はあっ……はあっ……んああっ、なんでそんな、上手いの～？ んんっ、あーし、どんどん興奮しちゃうじやあんっ……」

ラーディ「あああんっ……根元のほうまできたあ……んっ、そこお、性感帯だからあ……あんっ……んひっ、ちゃんとしてよお」

ラーディ「んんっ……上手い、やばあっ……あーしマジ濡れちゃうんだけどお……んっ、脱皮でえ、興奮するう……変態ドラゴンになっちゃううつ」

ラーディ「ああんう……んあっ……はあっ……やあんっ……んんっ、あんっ……はっ、んんんっ、やばあ、脱皮させられるのぉ、気持ちい……」

ラーディ「ああああんっ！ 一番敏感なとこお……尻尾の付け根え……やばあっ……あんっ、はんっ……んんんあああっ」

ラーディ「はあ～っ……はあっ……ああんっ……お、終わったあ……？」

ラーディ「はああ～……まーじで腰抜けるかと思ったあ……んあっ」

ラーディ「んんああっ……どーしよ、もうおまんこびしょびしょなんだけど……キミい、ヤバすぎだよお……」

ラーディ「ここにずっと住んでえ、あーしのお世話してくれない？ あーし、結構ずぼらだし、脱皮も面倒くさいしさあ……にしし♪」

ラーディ「まあ、でも、とりあえずのお世話はあ、あーしのびしょびしょになったおまんこを、気持ちよくしてもらわないとねえ……？」

ラーディ「キミの手先が器用なのはわかったからあ、今度は本気、出しちゃうよお？ あつ  
つーいセックス、がんばろーねっ♪ きやはっ♪」

## 7. 二回戦 ～強化セックス～

ラーディ「さあてっと……それじゃあ～……」

ラーディ「交尾の前に～、キミがもう、宝物隠してないかチェックさせてもらうね～♪」

ラーディ「にしし、キミのおちんぽもお、期待ですごく大きくなってるからあ～、もう宝物は奪わなくてもいいかもだけどお～」

ラーディ「あーしもまだまだ欲しいし……まだ隠し持ってるなら……欲張りなドラゴンちゃんに頂戴ね～」

ラーディ「あ～、あるじゃ～ん、高そうな短剣～。ヤバ～、鞘がめっちゃデコられてるんですけど♪ にしし、いいねいいね～」

ラーディ「こんなちっちゃい剣じゃ、あーしは倒せないだろうけどお、並べておくのないい感じ～。にしし♪ んじゃ、これはもらっておくとしてえ……」

ラーディ「ドラゴンを倒すならあ、短剣より、おちんぽのほうがいいかもね～♪」

ラーディ「あはああん、押し倒されちゃった～♪ ヤバ、キミ、やる気満々じゃ～ん。おちんぽでドラゴン倒しちゃうのかな～？」

ラーディ「いいよお、あーしももう、準備万端だしい……脱皮で興奮しちゃったドラゴンまんこに、おちんぽ入れて入れて～♪」

ラーディ「あああんんっ、バキバキおちんぽきたあ♪ んんっ、あんっ……んひいっ、一気に、総排泄孔の奥まで届いているうう」

ラーディ「あーしも興奮してるからさあ、さっきよりも穴の中、熱いでしょ～？ にしし♪」

ラーディ「キミのおちんぽもお、さっきより、熱くてかたあい……」

ラーディ「ドラゴンの炎に当てられて、生命力が強化されちゃったかなあ？ やっぱ、どうしよ、セックス大得意な男の子、作っちゃったかもお」

ラーディ「あんっ……んっ、ま、まあ、いつかあ。エロいこと、あーしも大好きだし……にしし、今はとにかく、激しくヤッちゃえばいいよね」

ラーディ「んほおおっ、はじめからあ、奥っごつごつ、えぐってクるうっ！ んはああつ、あっ、腰使いやっぱああ……♪」

ラーディ「あー、さっき届かなかつたところお……んんっ、あんっ……ガンガンくるうつ……はあつ……ああつ……んんっ！ んひいっ」

ラーディ「あー、やっぱ、気持ちよすぎて涎でちゃう……はあっ、んあっ……人間の男の子にい、激しく求められるのぉ、すっごくイイんですケド♪」

ラーディ「ああんっ……んああっ……おほおっつ♪ 腰使いすごいい、樹海最強のドラゴンなのにい、おちんぽに墮とされるう♪」

ラーディ「キミい、セックスの才能あったんじゃーんっ♪ いいよお、どんどんキテ、あーしを気持ちよくさせてえ……♪」

ラーディ「んんっ……あんっ……今までえ、だーれも来なかったからあ、こんなに気持ちが熱くなったの……初めてかもっ……きやはは♪」

ラーディ「んんああっ……はあんっ……あんっ……むちゅっ、あむう……んっ、やば、昂ってきたから……勝手にキスしちゃううう……」

ラーディ「別にいいよね？ キスハメセックスしてもお……あんっ……ちゅっ……れるつ……んちゅう……」

ラーディ「んちゅっ……んん～♪ キミのお口美味しい～♪ んーまっ、ちゅ……あんっ……ちゅぶ……ん……れるう」

ラーディ「ああんっ……ラブラブちゅっちゅキスセックスしゅきい……んっ……あんっ……ちゅっ、むちゅ……あんっ……はあんっ……」

ラーディ「あんっ……すっこ、腰めっちゃ突き上げてくるう……あんっ！ んはっ、キミもお、めっちゃ熱くなってんじゃーんっ♪」

ラーディ「んっ、このままあ、密着しながら……んんっ……ああっ、いいっ……んっ……んんあっ、ああっ……！」

ラーディ「んおおっ！ あっ、すっこ！ おちんぽお、もっと大きくなっちゃったあ……やばっ、お腹の奥うつ、おちんぽでいっぱいになっちゃううつ！」

ラーディ「こんなのおつ、んひいっ！ こんなでかちんぽに射精されたらあ……んああっ、あーし、負けちゃうかもお……！」

ラーディ「いやああんっダメっ、あーし負けないかんねっ、セックスでも最強のお、樹海ドラゴンなんだからあ……！」

ラーディ「んのおおっ……おおうつ、あんっ、ほおおつ、んんっ、でも、ヤバあつ、ちんぽすっごくてえ……おほおつ！ んああつ、下品な声でちやううつ！」

ラーディ「ああっ、んああっ！ すっこ！ えつぐう！ いひいんっ！ もっとゴツゴツしてえっ！ ドラゴン鳴かせるつよつよちんぽでもっと交尾してえ！」

ラーディ「んっ、あむう……っ、ちゅっ……んばあ、んべえ……んんっ！ ほらあ、いっぱいいちゅーもしてあげっからあ……んああつ、あんんっ！」

ラーディ「ほひいっ……ほおつ！ んおつ！ すごっ、あっ、昇ってくるっ、あーしの中あ、めっちゃ熱くなって……んんっ！」

ラーディ「んおおおっ！ ああんっ！ おほおお……んんんおおっ！ すっごお！ アクメきそうっ！」

ラーディ「んんんんっ！ あっ！ んあああっ！ おまんこびくびくしてるう！ んおおっ！ おほおっ！ あーやばっ、やばやばやばっ！ めっちゃイクっ、んああっ、すっごいアクメくるのぉっ！」

ラーディ「ねえ、ねえっ、イクっしょ？ んほおっ、キミもイクでしょう？ おちんぽこんなに熱くなってるんだからあっ」

ラーディ「出してえっ、ドラゴンの最大アクメおまんこにい、激ヤバの精液たっぷりだしてええっ、おまんこおっ、めっちゃ締め付けるからああ」

ラーディ「んおおおっ！？ おほおっ、あっくるっ、めっちゃアクメくるっ、んんほおおおっイグっ、イグイグイグイグううううう——ツ！」

ラーディ「おほおおおおおっ、きたああっ、ドラゴンのアクメおまんこに、やっぱいくらい射精きたああっ」

ラーディ「おひいいいっ！ ダメええっ、またイグっ、イッてるのにい、またイッちゃうう、ヤバいのぉっ！ アクメ止まんないいい」

ラーディ「おほおっ、動くのやめてえっ！ イッちゃうからあっ、イキまくって狂っちゃうからあっ」

ラーディ「んんひいいいっ！？ また精液きたああっ！ ンおっ！ すっご、やばあ、あーしのおまんこ、精液でだぶだぶになるうつ！」

ラーディ「連續射精ちんぽすごひいいっ！ イグっ！ あーイグうっ、連續アクメで、訳わかんなくなるっ！ イグイグイグイグうううう——ツ！」

ラーディ「はあああんっ、まだ出てるうう……すっごおお！ あーしのおまんこがあ、うねうね動いて精液全部しほりとっちゃううっ！」

ラーディ「くひいいんっ、んああっ、だめええ、お腹いっぱいになるからあっ！ もう精液出しちやらめえっ！」

ラーディ「ああんっ……んんんっ、あううっ……はあんっ……あっ、んっ、お、収まったあ……かな……？ んんっ、もう……ヤバ、すごい……」

ラーディ「はあっ……はあっ……はあ～～……あっ、すっごおお、お腹押すとお、精液、どぴゅどぴゅってえ……吹き出しちゃうう……」

ラーディ「キミのちんぽヤバすぎなんだけど……どうなってんの……？ って、アレからあ、あーしの炎で、めちゃ強化されちゃったんだね……」

ラーディ「やばすぎでしょ……にっしし♪ これはもう、あーしとずっと一緒にいて、あーしを永遠に気持ちよくしてもらうしかないね……」

ラーディ「ふふ、ねえ、キミのおちんぽ、最高だったよ……どんな宝物よりもお、キミのこと気に入っちゃったかも……」

ラーディ「これからもあーしのことお、い～っぱい、きもちよ～くしてね♪ にしし、約束だよお……？」

8. 【ルート分岐】質問 ～世界の半分をキミにあげよう～

ラーディ「ふうう～……あったまるねえ～」

ラーディ「あはは、さすがのあーしもお、あれだけ激しくヤッちゃったら、ちょっと休憩は必要かな～なんて」

ラーディ「キミも疲れたっしょ？ くすくす、ま、あんだけすごいちんぽになっちゃったら、大変だもんねえ」

ラーディ「ま、あーしの魔法の炎に当たってるから、またおちんぽがすごいことになっちゃうかもだけど……くすくす♪」

ラーディ「ここは誰も来ない樹海の奥だけどお、キミが来てくれて、あーしとっても嬉しいんだよね～♪」

ラーディ「ここに来るまで、大体みんな死んじやうか、やってきたとしても、あーしの熱であっさり焼けちゃうからさあ……」

ラーディ「だからあ、頑張ってるキミには、トクベツなご褒美……この世界の半分をあげちゃおっかなあ」

ラーディ「つまりい、いつかあーしの見ている世界を、半分こ……全部共有する、ツガイになるってケーヤク、ねっ♪」

ラーディ「ぶっちゃけプロポーズなんだけど、どう？ 悪い話じゃないっしょ♪」

ラーディ「まあ、ツガイ？ と奴隸？ も似たようなもんだから、キミはずっとあーしの言うことを聞くわけだけど……」

ラーディ「にしし、一人ぼっちは寂しいからさあ、キミの精子でたくさん卵を産んでえ、家族を増やさなきゃ……ねっ♪」

ラーディ「んん～？ ちょっとお、なにい？ もしかしてイヤなのぉ？」

ラーディ「ふ～ん、あっそ。別にいいけどさあ、キミ、あーしの炎の影響を受けてっからあ……ここから逃げるなんてできないよぉ？」

ラーディ「もう、あーしの炎を定期的に浴びないとお、体が灰になって死ぬ身体になってるからね～♪ きやはは♪」

ラーディ「あれ？ 言ってなかったっけ？ うそ～！ ごめんごめん！ うっかりしてた☆ でも、ずっとあーしと一緒にいれば問題ないから……ねっ♪」

ラーディ「わかるでしょ……？ にしし、キミ、もうあーしの一部になってんの。さよならなんてユルサナイから……♪」

ラーディ「ま、どうしてもツガイが嫌ならあ……あーしが優しく食べてあげてもいいけど…

…」

ラーディ「あーしの中でえ、炎に包まれながら死んでくのも、まあまあ気持ちイイと思うよ～？ どうするからはキミ次第だけど、さっ♪」

ラーディ「さ、男なら覚悟キメて、選んじゃってね～♪」

ラーディ「あーしとしてはどっちでもいいけどお……キミの人生に関わることだからあ、真剣に悩んで、答えを聞かせてね♪」

ラーディ「世界の半分か、あーしのお腹で燃やされながらご飯になるか……にしあ、キミがどっちを選ぶか、あーし、とっても興味があるなあ……くすくすくすくす♪」

9 A.

【奴隸ルート】無限射精排卵セックス～魔竜のツガイ～

ラーディ「おお～、今日も火山がいきおいよく噴火してんね～。元気元気～♪」

ラーディ「にしし、ここで力を貯めたらあ、いつか遺跡の外に出て、魔竜として君臨しちゃうのも……結構楽しいかもね～♪」

ラーディ「キミのおかげで、外の世界にも興味が出てきたしい……ねっ♪」

ラーディ「きやはは、やだあ～♪ あーしが来ただけで、キミのおちんぽもおっきくなってじゃ～んっ。こっちも元気だね……♪」

ラーディ「そんじゃあ、いつか一緒に外の世界に行く時まで……二人でい～っぱい楽しいことしようね～♪」

ラーディ「キミの装備はもう全部うばっちゃったからあ、キミがあーしに払えるものはないけどお……ツガイの契約したもんねっ♪」

ラーディ「だからあーしがムラムラしたときはあ、いつでもキミのおちんぽ使わせてもらうよ？ 約束～♪ そんじゃ、早速……」

ラーディ「キミの固くなったおちんぽをお、あーしのアツアツのお口でいただきやいま～すっ♪ はーむっ……んんっ」

ラーディ「んっ……じゅぶ……れるうつ……んはああっ、すっごお……あーしとセックスするたびに、どんどん大きくなってんじゃな～い、これ？」

ラーディ「じゅるるるっ、んはあっ、あんっ……じゅぶっ……ん～っ、れるう……にしし、すっごお、あーしのお腹の奥まで届いちやうね……♪」

ラーディ「あーしのあつい舌でえ……んじゅる……こうしてえ、裏から舐められるとお… …はあっ……んじゅぶうつ……サイコーでしょお？」

ラーディ「さきっぽだけじゃなくてえ……タマタマのほうも舐めてあげちゃおうかな～… …あ～んっ……んんっ、は～むっ……じゅぶう……んべえ……」

ラーディ「こうひてえ……んぶ……タマタマを口に含んでえ……あむっ……じゅぶ……れろお……れるう……」

ラーディ「お口でころがひちゃうよ～♪ あんっ……じゅぶ……んんっ……れるう、れろれろれろれろ～……♪」

ラーディ「ふはあっ……ああんっ、腰がびくんってなったあ……にしし、もう我慢できないのぉ？ じゅぶっ……れるっ……んんっ、せっかくあーしがご奉仕してあげてるのにい」

ラーディ「いいよお……そんじゃ、早速ツガイ同士の交尾、始めちゃおっか♪」

ラーディ「はーい、じゃあねえ、今からこのお、ドラゴンの一つしかない穴にい、キミのおちんぽ、いれちゃいまあ~す」

ラーディ「でもちゃんと入るかなあ？ だってえ、ちんぽのカリを入れるだけでえ……んああつ、すっご、もう、んっ……おまんこ、みちみちってなっちゃうしい……！」

ラーディ「はあああんっ……んっ、すごお……おちんぽ入ってくるう……んっ！」

ラーディ「カリがあ……んっ、ごりごりってえ、あーしのおまんこ、えぐってるっ……ああんっ……イイっ、このおちんぽ、すっごく馴染んでるう……♪」

ラーディ「やっぱツガイのおちんぽはこうでなくちゃねえ……はんっ……んっ、やああつ、んああつ、すっごお……♪」

ラーディ「全部はいったかなあ～？ にしつ、やっぱあ、最初はよわよわちんぽだったのにい、いつの間にかこんなに大きくなるなんてえ～♪」

ラーディ「やっぱおちんぽの大きさが、ツガイには一番大事だよね～♪」

ラーディ「んっ……んしょっ……んっ、えいつ、えいつ……んんっ、ああんっ……」

ラーディ「にしし、最初はあ、ゆっくり……慣らしていかないとねえ～♪ はんっ……んっ、あんっ……はつ、やつ……♪」

ラーディ「いきなり激しいのもいいけどお～、毎回そんなのしてたら、キミがぶっ壊れちゃうかもしれないし？ それはもったいないからあ～♪」

ラーディ「せっかくツガイになったし……はんっ……んんっ、なが～く、じっくり～楽しませてもらっちゃお～♪」

ラーディ「うんっ……んっ、くひいっ……」

ラーディ「ああ～っ……んああつ、あうつ、はあつ、んんっ、ああんう……ゆっくり動いているのにい、おちんぽどんどん固くなってくれ……」

ラーディ「あーしの炎でえ、すっかりヤバヤバちんぽになっちゃったねえ～♪ もう二度と、人間のおまんこに入れられないんじゃない？」

ラーディ「まあ別にいいよね～♪ だってえ、奴隸……じゃなかった、ツガイになったんだし、浮気なんかしないもんね～？」

ラーディ「浮気したら骨まで灰にするかんねっ♪ 他の女のまんこに入れちゃだめだぞっ♪」

ラーディ「んおおっつ！ 腰動いてきたあつ！ やだあ、もう、独占欲見せたら興奮しちゃった？」

ラーディ「にしし♪ いいねえ、あーしもお、そういう子は嫌いじゃないからあつ……んっ……おおつ、いいつ……んんっ、しゅごつ……いっぱいしてえ……♪」

ラーディ「ほおおっ……くるうつ、んんうつ、でっかいおちんぽ、あーしのお腹ごんごんつてえ……んひいいつ……あーしも熱くなるう……」

ラーディ「んひいいっ……んおおっ……あへええっ」

ラーディ「ああんっ……やだあっ……気持ちよすぎてえ、炎吐いちやったあ……」

ラーディ「でも……ふふっ……キミ、すごいねえ。あーしの炎でちょっとあぶられても、もう全然、平気なんだね～♪」

ラーディ「さんざんあぶったせいでえ、強くなっちゃったねえ。装備なしでも樹海の冒険で  
きるんじゃない？ ……いいよお……あんつ、もっとお、もつとしてえつ」

ラーディ「あーしもいっぱい腰振るからあ、ちんぽ奥まで打ち付けてえっ」

ラーディ「んんんあああっ！ ああっ！ んんんあっ！」

ラーディ「はああっ、はあっ、身体あっ、すごく熱くなってるうっ！ んっ！ あんっ！ んんああっ！」

ラーディ「おほおおっ！ あひいっつ！ しゅごつ、腰使い、上手くなってるう！ またドラゴン負けちゃうっ！」

ラーディ「ああんっ……んんああっ！ ひいんっ……んほおっつ！」

ラーディ「あっ、くる、すごいのくるっ！　出してえ、キミもっ、出してえ、あーしの中に精液だしてえ、いっぱい産卵させてえっ！」

ラーデイ「あんっ……！ んんんっ！ あっイグっ、やっべっ、イグのお  
っ、ダメダメっ、イグっ、イグイグイグイグウウウ———っ！」

ラーディ 「んんんあああっ！ 出てるう！ マグマみたいな精液てるうつ！ んひいい  
いっ！ イってるうつ！ イッてるからああっ！」

ラーデイ「んほおおおっ！ い、いつまで出すのおおっ！ お腹膨れちゃううっ！ んほおおっ！ んごおっ！ すっごお……やばあ……とんでも精液でえ、またイグっ、イグっ！」

無限射精でイカされるのおおおつ！」

ラーデイ「あああんっ……んああっっ……はあ、はあっ、自分で育てたとはいえ……あんっ、ツガイのおちんぽお……ヤバすぎでしょお……」

ラーディ「ああ……すっごお、おまんこからあ、だらだら精子垂れてきてるう……ああんっ……んんあっ、あつう……」

ラーディ「あっ、ダメっ。精液死ぬほど出されたからあ……排卵欲が高まっちゃうっ……んんあっ、あああんっ……おおうっ、卵巣の奥から、卵でるうつっ！」

ラーディ「おおおっつ……ンほおおっ……ああっ、ダメっ、でっかい卵がああっ、卵管通っちゃうっ……う、生まれるうっ！」

ラーディ「あああんっ……んんああっ……やだああ、おっきい卵お、産んじゃったんですけどお……」

ラーディ「これであーしもママになっちゃうかな？ でも、ドラゴンの卵は孵るのに、十年くらいかかるからあ……」

ラーディ「子どもが生まれるまでは……にしし、二人っきりでい～っぱい交尾、しちゃおうね……♪」

ラーディ「まだまだたくさん卵を産んで、大家族を目指すんだからあ……もっともっと、おちんぽ頑張って、大きくさせなきゃだめだよ……きやははは……♪」

9B. 【捕食ルート】丸呑み生贊～胃の中で焼かれる～

ラーディ「ええ～？ キミ、丸のみされたいのお？ マジでえ？」

ラーディ「ちょっとヒくんですケド……ん～、でもまあ、昔からあーしの生贊になりたがる子もいたしい……人間ではフツーなのかな？」

ラーディ「まあ、いいやあ。ちょーどお腹も空いてたしい……ご飯になってくれるならあ、ありがたくいただきまあ～すっ♪」

ラーディ「まずはあ……あーしの胃の中を……んんっ、んっ……空っぽにしないとね～」

ラーディ「んっ……んんっ……内臓を、動かしてえ……んんっ……んっ……はあんっ……うん、良い感じかなあ～」

ラーディ「にしし、お腹の中にキミのお部屋を作ったからあ……安心して食べられに来てねえ～♪」

ラーディ「あーしの胃はちょっと特殊でえ、他の生物みたいに、胃酸で溶かすんじゃないんだよねえ」

ラーディ「胃の中で、あーしの炎に包まれてえ、一気に焼いちゃうよ～。肉体はなくなるけど、キミの生命エネルギーだけ、きちんともらってあげるし♪」

ラーディ「にしし、装備品だけじゃなくて、命まであーしに貢ぎたいってことだよね♪ あーしのこと大好きじゃ～んっ♪ 嬉しいんですケド～っ♪」

ラーディ「ちゃ～んと美味しく食べてあげるからあ、安心してね……♪」

ラーディ「んじゃ、そろそろお、いただきま～すっ。頭さえ飲み込めれば、イケるはずだし～♪」

ラーディ「まずはアゴをはずして……んごっ、んがあ……んっ、がっ……」

ラーディ「は～い、それじゃあ……頭からいくからね～、いっただきまあ～～～すっ……んっ、んごっ……んぐっ……あああ～～～んんんんっ♪」

ラーディ「んんんああつ……んっ……んぐっ……んごっ……んんんう」

ラーディ「んんんぐぐぐぐぐっ……あ、ありやつ……どっかひっかかってる？ んもうっ、キレイに丸呑みされてよ～？」

ラーディ「しゃあないなあ～……んぐっ……ちょっと内臓使って押し込むからあ……んぐうっ、我慢してよお？」

ラーディ「んんっ……ごぐっ……んんんごっ……あんんぐぐぐぐ」

ラーディ 「んんんっ……んんん～～～……ごっつっくん……♪」

ラーディ「んんっ、んぐうっ……んはあっ……」

ラーディ 「んっ……げっつぶう～～～～～～～っ♪」

ラーディ「ふうう～～～っ♪ よしよし、無事に胃の中に入れたね～……にしし、やっぱああ、お腹めっちゃ膨らんでるう♪ 人間一人分はいちゃった」

ラーディ「あかちゃ～んっ、聞こえまちゅか～？ ……なんてねっ、にしし♪」

ラーディ「胃に入るときに、骨の折れたような音がしたけど……まあ、どうでもいいよね～♪ だってこれからキミ、灰になっちゃうんだもんね～♪」

ラーディ「あ、胃の中の体液は、よく浴びておいてね～♪」

ラーディ「その体液が麻酔になって、痛みを取り除いてくれるからねっ、ちゃんと浴びてないと、焼け死ぬ苦しみでエグイから♪」

ラーディ「ま、言わなくても、もう粘液まみれだと思うけど♪」

ラーディ「そんじゃまあ、そろそろ……キミのこと、炎に変えて、美味しいただいちやおつかな♪」

ラーディ 「最初はとろ火でえ……キミの足や腕から焼けていくよお～」

ラーディ「にしし、ほらほら、肉の焼ける良い音～？ 気分はどう？ あーしの炎に包まれてえ、あったかくてえ、天国に行けそうでしょう～？」

ラーディ「キミの身体が焼けてえ、骨になってえ、骨も焼けて灰になって、最後はあーしの身体と一体化するの……んん~♪ 他では絶対できない体験だよねっ♪」

ラーディ「ああん~っ、すっごおい、キミの肉が、炎に変わっていくの、お腹の中で感じちゃうう~っ♪」

ラーディ「ああ、生命力すっごおい……やっぱここまで来るだけあって、キミ、すっごく美味しい生贋だったんだね♪」

ラーディ「大丈夫……焼かれたキミの力、あーしが残さずもらってあげっからあ……ね♪」

ラーディ「きやはは、炎に包まれて、もう腕も足もなくなっちゃった♪」

ラーディ「でもわかるよ……キミも喜んでるよねっ。あーしと炎で一つになれて、すっごく嬉しいのが伝わるの♪」

ラーディ「あーしの体の中で、ずっと一緒にいられるよぉ……何百年も、この場所で、ずっとずっと、一緒だから……」

ラーディ「さあ、そろそろ仕上げだし？ 全部炎に包んで、なんにも考えなくて良くなして

あげる……♪」

ラーディ「今日まで頑張って生きたね……♪ その頑張り、あーしが全部、炎にして飲み込んであげるから……」

ラーディ「よしよし、えらいえらい……キミの命の力、とっても美味しいよ……」

ラーディ「さ、目を閉じて……つよおい、ドラゴンと一緒になれるのを喜びながら……炎になってね……♪」

ラーディ「あああんん～～……すっごおい、最高の魂、最高のごちそう……んんっ、あんっ……はあんっ……♪」

ラーディ「あはああ～～～♪ 美味しい魂、ごちそうさまでしたあ……♪」

ラーディ「にしし、これでもう、一人じゃないからあ……ずっと一緒にいようね……ずっと、ずっと、ずうっ……と、ねっ♪」

(END)